成人式に思う

橋場
福住　明子さん

一九六五年十一月十三日、この世界に生を享けて以来、二十年が早や過去となりました。

幼稚園から高校までの教育は、社会に生きて行く為の準備期間であり各段階を経て自分の世界を拡大し方法手段を学び蓄積して、高校卒業と共に就職し、社会の一員に参加して二年目を迎えました。成人式と共に名実共に社会人としての権利義務を分担し、未知なる未来に向かって旅立ちの年だと考えています。

就職以来、会社の一部門からの視界ですが技術の研究開発に真摯に取り組んでいる若い人達と、又、企業活動が合理的に機能する様に管理する熟年世代が、協調して会社を支えている事を知りました。そして、研究、努力しなければ、厳しい国際競争の世界経済に生きて行けない社会がある事を知りました。

毎朝、遽しい満員の通勤電車から、各会社にはき出される人波その一人として、丸の内のビル街を歩きながら私の会社を含めて、日本の企業が世界の経済の中でたくましく活動している姿を常に実感しています。

二十一世紀に向かって社会はあらゆる面で大きく変ぼうし、多様化して行くことでしょう。人間生活の多様化、機能化に対応して、創造から供給過程の大幅な変化が予想されます。この社会を理解して行くための勉強が是非とも必要です。

現代世界の平和を維持継続して人間の幸福を追求する目的を達成するためには、明日の世界の理想像を予測し、理想の実現の為に、人間の英知を信頼して不断の努力を怠ってはならないと思います。

私共若い世代は、ただ漫然と、全体の流れに我が身を任せるのではなく、自らこの社会に正しい判断が下せる様、一人一人の資質を高める事が民主主義社会に絶対不可欠な事だと思います。

二十歳になって思うこと

長塚
海保　礼子さん

私が生まれてから、二十年という歳月がたちました。

この二十年間を振り返ってみると、ここまで成長してこれたのは、けっして自分一人の力ではなく、そのかげには、家族や学校、社会など何らかの形で触れ合った人々の支えがあったからこそ、今の自分があるのだということを改めて感じています。

成人とは、一人前の人間として社会が認めることとありますが、いくら法律的に社会が認めても、本当の〝一人前の人間〟にまだまだ自分は半分も達していません。今の自分を振り返ってみると、いつも誰かに頼り、親のスネをかじり、毎日がだらだらと生きていることがあたり前かのように過ごしているのが現状です。

これからは、自分自身の行動や言動に対し今まで以上の責任を持つとともに、社会に対しては自分を試すつもりで積極的な姿勢で何ごとにも取り組んで個性ある人生を送りたいと思います。

そして最後に、晴れて成人の日を迎えることができ、両親やその回りの皆様に深く感謝いたします。

「鬼来迎」木版画完成 町民会館ロビーに

十二月二十四日、鶴岡信次さん（元光中教諭）が、町に「鬼来迎」の多色刷木版画二点を寄贈されました。

この木版画は、一枚が畳み約三畳分もある超大作で、「黒鬼、赤鬼」と「賽の河原」の場面が描かれています。

鶴岡さんは、昭和五十八年四月から六十年十一月までの間、この木版画ひとすじ制作にあたってきました。大きいため四等分し刷り上げ、張り合せたものです。

「ずれないように掘り、ずれないように刷り、ずれないように張る、これに苦心しました。」と話していました。

みなさん、町民会館ロビーの壁面両サイドに据え付けられたこの版画、是非ご覧ください。

▲完成した作品を前に鶴岡さん